

## 読書通信



No. 119

① この正月は大著に挑戦した。世界的なベストセラーとなり、12月に邦訳が出たトマ・ピケティ『21世紀の資本』（みすず書房、5940円）は、両大戦や大恐慌によって縮小していた資産と所得の格差が再び拡大しつつあることを歴史的・国際的に詳細に分析、解明しているのだが、多くの事例とりわけバルザックの『ゴリオ爺さん』やオースティン『高慢と偏見』などの文学によって語らせるなど、無味乾燥な経済書とは異なる優れた歴史・政治書でもある。

市場と競争が豊かな社会を予定調和的に生み

出すなどとは幻想であることが極めて説得的に具体性をもって主張される。主題は、国民経済全体としての資本収益率( $r$ )と経済成長率( $g$ )との差にあり、 $r > g$ が強まるほど富の分配における不平等(格差)が拡大するという点にあって、この傾向は世界的成長率の低下が必然の21世紀にあつては不可避的に進むというにある。大部の本はつらいという人は好みの章を拾い読みすることでも良いかもしれない。正月の新聞広告では「**忽ち5刷!**」の文字が躍っていた。版元が良心的な書物の多い出版社であるのも锦上添花を添えるものとして喜ばしい。

② 10月初版で年末にはこちらももう7刷というのでやっと気づいた本が**早野龍五・糸井重里**『**知ろうとすること**』(新潮文庫、464円)

である。早野さんは東大教授で原子論の専門家、そして福島原発事故以来、ツイッターで内部被曝調査の結果を発信し続けてきた。

言われなき風評が残り、若い女性は福島から逃避し続けている。そこには国の基準値の決め方、「放射能0以外は危ない」と主張する一部の学者たち、そして放射線について知ろうとせずにもやみくもに怖がる人びと、という負の三角形がある。二人の対談は穏やかで謙虚でありながら、なぜ極度に怖がるのが間違いなのか、現実には、どう対応していけばいいのか、など非常にわかりやすい。一人でも多くの人に読んでほしい。コーヒー一杯節約すればすむ話だ。

③ 偉大な政治家の自伝である**斎藤隆夫**『回顧七十年』(中公文庫、1080円)も良かった。

議会演説こそ政治家にとつての正念場と考え演説のために徹底準備し、落選しては演説どころではないと選挙運動に全力を傾けた斎藤は、革新派に対抗する「現状維持」の保守政治家で、「平和」論を批判したという。巻末に「**爾軍演説**」など歴史的名演説が収録されている。

④ 日本・ロシア・中国が交錯した旧満州。その優れたドキュメンタリーの歴史書である**ディビッド・ウルフ**『**ハルビン駅へ**』(講談社、2700円)は近代日本を新たな視点から照射する大著である。膨大な史料を渉猟し、特にロシアが決定的に重要な役割をかの地で果たした歴史の「コマを鮮やかに描いてみせた。一種の政治空白の中でハルビン一帯が自由な言論、文化を謳歌していたとは。ほんとに歴史は面白い。(純)